

外国人被爆者数

120

(単位: 人)

平成 6 年 9 月末現在

| 国 籍   | 前月末現在数 | 新 規 | 転 入 | 転 出 | 死 亡 | 帰 化 | 月末現在数 |
|-------|--------|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 中 国   | 74     | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 74    |
| 朝鮮・韓国 | 92     | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 92    |
| 米 国   | 0      | 2   | 0   | 0   | 0   | 0   | 2     |
| そ の 他 | 4      | 0   | 0   | 1   | 0   | 0   | 3     |
| 合 計   | 170    | 2   | 0   | 1   | 0   | 0   | 171   |

\* その他の内訳

在外邦人(カナダ) 1人

" (ブラジル) 1人

ポートランド人 1人

広島・長崎被爆者調査会(広島県)

146.3名 籍 100,128 (10名)

外 籍 約 1,600

在 朝 1,524

県事業概要より  
5年度末現在

被爆者の年齢区分

(H 6 . 3 . 31現在 単位：人、%)

| 区 分    | 総 数 | 45～<br>49歳      | 50～<br>54歳 | 55～<br>59歳 | 60～<br>64歳 | 65～<br>69歳 | 70～<br>74歳 | 75～<br>79歳      | 80歳<br>以上 |       |
|--------|-----|-----------------|------------|------------|------------|------------|------------|-----------------|-----------|-------|
| 長崎県    | 男   | 11,825          | 660        | 1,523      | 1,208      | 2,857      | 3,151      | 690             | 696       | 1,040 |
|        | 女   | 15,920          | 710        | 1,799      | 1,432      | 2,700      | 3,568      | 2,325           | 1,484     | 1,902 |
|        | 計   | 27,745          | 1,370      | 3,322      | 2,640      | 5,557      | 6,719      | 3,015           | 2,180     | 2,942 |
|        | 割合  | 100.0           | 4.9        | 12.0       | 9.5        | 20.0       | 24.2       | 10.9            | 7.9       | 10.6  |
| 長崎市    | 男   | 24,321          | 1,831      | 4,742      | 4,183      | 5,550      | 3,839      | 1,140           | 1,406     | 1,650 |
|        | 女   | 38,359          | 1,846      | 5,239      | 4,813      | 6,420      | 6,530      | 5,317           | 3,541     | 4,653 |
|        | 計   | 62,680          | 3,677      | 9,981      | 8,976      | 11,970     | 10,369     | 6,457           | 4,947     | 6,303 |
|        | 割合  | 100.0           | 5.9        | 15.9       | 14.3       | 19.1       | 16.5       | 10.3            | 7.9       | 10.1  |
| 合 計    | 男   | 36,146          | 2,491      | 6,265      | 5,371      | 8,407      | 6,990      | 1,830           | 2,102     | 2,690 |
|        | 女   | 54,279          | 2,566      | 7,038      | 6,245      | 9,120      | 10,098     | 7,642           | 5,025     | 6,555 |
|        | 計   | 90,425          | 5,047      | 13,303     | 11,616     | 17,527     | 17,088     | 9,472           | 7,127     | 9,245 |
|        | 割合  | 100.0           | 5.6        | 14.7       | 12.8       | 19.4       | 18.9       | 10.5            | 7.9       | 10.2  |
| 45～64歳 |     | 47,493人 (52.5%) |            |            |            | 65歳以上      |            | 42,932人 (47.5%) |           |       |

外国人被爆者の推移 (長崎県内居住者分)

(各年度末現在 単位：人)

| 年度別 | 国名 | 中 国 | 韓 北 朝 鮮 | 米 国 | ポ ー ラ ン ド | ブ ラ ジ ル | 計   |
|-----|----|-----|---------|-----|-----------|---------|-----|
| 59  | 県  | 6   | 30      | 1   | 2         | 1       | 40  |
|     | 市  | 72  | 114     | 4   | 1         | 1       | 192 |
|     | 計  | 78  | 144     | 5   | 3         | 2       | 232 |
| 60  | 県  | 5   | 27      | 2   | 1         | 0       | 35  |
|     | 市  | 82  | 106     | 3   | 1         | 1       | 193 |
|     | 計  | 87  | 133     | 5   | 2         | 1       | 228 |
| 61  | 県  | 5   | 30      | 2   | 1         | 1       | 39  |
|     | 市  | 83  | 101     | 7   | 1         | 1       | 193 |
|     | 計  | 88  | 131     | 9   | 2         | 2       | 232 |
| 62  | 県  | 5   | 31      | 2   | 1         | 1       | 40  |
|     | 市  | 81  | 101     | 12  | 1         | 1       | 196 |
|     | 計  | 86  | 132     | 14  | 2         | 2       | 236 |
| 63  | 県  | 5   | 29      | 2   | 0         | 0       | 36  |
|     | 市  | 84  | 104     | 10  | 1         | 0       | 199 |
|     | 計  | 89  | 133     | 12  | 1         | 0       | 235 |
| 元   | 県  | 4   | 29      | 2   | 0         | 0       | 35  |
|     | 市  | 82  | 101     | 4   | 1         | 0       | 188 |
|     | 計  | 86  | 130     | 6   | 1         | 0       | 223 |
| 2   | 県  | 4   | 28      | 3   | 0         | 0       | 35  |
|     | 市  | 79  | 97      | 3   | 1         | 0       | 180 |
|     | 計  | 83  | 125     | 6   | 1         | 0       | 215 |
| 3   | 県  | 4   | 30      | 3   | 0         | 0       | 37  |
|     | 市  | 77  | 93      | 4   | 1         | 1       | 176 |
|     | 計  | 81  | 123     | 7   | 1         | 1       | 213 |
| 4   | 県  | 2   | 29      | 3   | 0         | 0       | 34  |
|     | 市  | 78  | 98      | 4   | 1         | 1       | 182 |
|     | 計  | 80  | 127     | 7   | 1         | 1       | 216 |
| 5   | 県  | 2   | 28      | 3   | 0         | 0       | 33  |
|     | 市  | 74  | 95      | 9   | 1         | 3       | 182 |
|     | 計  | 76  | 123     | 12  | 1         | 3       | 215 |

※中国には台湾も含む

## 第4章 外国人の被爆と長崎の被爆者の現在

### 1 外国人の被爆

#### (1) はじめに

原爆はその巨大な破壊力のため、当然無差別の攻撃となる。また本来奇襲性を有しているため、予告はあり得ない。必然的に、その威力圏内にいた人々は、すべて死傷する。

原爆の投下目標を選ぶ際、米国の投下作戦の指導者は、原爆の破壊力が充分に実証され、日本人の戦意が全く阻害<sup>そくがい</sup>するような都市でなければならないと考えた。

それは中都市以上の規模を有し、軍事的にも、交通上(港湾)も重要な政治経済の一中心地であろう。そこには当然日本人以外の国籍、すなわち外国人も生活、生存していた。

それは当然予測されたはずである。しかし、原爆投下作戦の遂行に当っては、それは黙過しなければならなかった。それが戦争というものであり、特に原子爆弾使用のもつ残酷性、非人道性である。

特に長崎市は古くから国際都市で、中国とは一衣帯水の隣の都市である。また欧米からのキリスト教布教の拠点でもある。そうしたことから戦前、中国人や、欧米の宣教師らが多数いた。幸か不幸か、こうした中国人や米国の同盟国人、すなわち日本側からみれば敵性外国人は、戦争中宣教師、教師に至るまで、本国に送還されるか、あるいは長崎以外の、都市から離れた山地に強制監禁されていたが、当時、長崎市内にはやはりこれらのうらの少数の人々が残っていた。

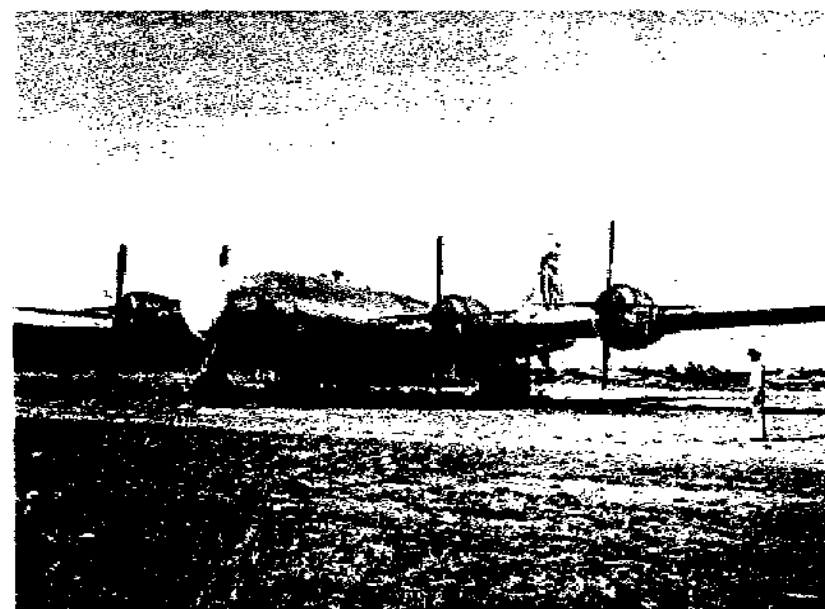
また長崎市内の造船所や兵器工場には、特に太平洋戦争のころから多数の朝鮮人が徴用その他で労働に従事させられたり、あるいは市内の防空壕掘りなどの作業に従事していた。

さらに長崎市内には捕虜収容所(福岡俘虜収容所第14分所)があり、そ

こにはイギリス、オーストラリア、オランダの将兵が収容されていた。

そういった、いろいろな国々の外国人(朝鮮人は当時日本国籍であったが)が無差別に原爆攻撃にさらされたのである。

長崎市内に捕虜収容所があることは、当時米軍側でもすでに察知しており、サイパンの現地空軍司令部は、この収容所の存在自体が、原爆投下目標地の選定のうえで、決定的な影響を及ぼすものであるかどうかということ、本国の参謀本部あてに照会したいきさつがある。しかしそれに対する参謀本部の回答は、「当初の作戦計画に変更なし」という非情なものであった。



長崎に原爆を投下した米軍機(ボックス・カー号)

〔参考〕

(1005号電) スパーツ將軍(戦略爆撃空軍司令官)から参謀本部への照会電

8月3日以降予定の長崎に対するセンターボード作戦(原爆投下作戦のこと)に関して

「写真による確認はされていないが、捕虜関係筋の報告によれば、長崎市の中心から1マイル北方に連合軍捕虜収容所がある。

最初のセンターボード作戦にとって、このことが機動的選択に影響を及ぼすか? 緊急に回答されたい。」

(1027号電)

「捕虜関係筋の報告によれば、センターボード作戦のための標的4都市のうち、広島市は連合軍捕虜収容所のない唯一の都市である。」

この電報照会に対し、トーマス・ハンディ参謀総長代理から次のように回答がなされた。

1945・7・31 ハンディよりスパーツ將軍へ(至急電)

「1005号、1027号電参照 センターボード作戦用に指定されていた標的はそのまま変更なし。(以下略)」

1005号電に記されているその捕虜収容所は、長崎市の幸町にあった。そこは爆心地から約1,000mの近距離であった。原爆のときそこに居合わせた捕虜はすべて被爆し、その一部は爆死または爆傷を負った。(後述)

## (2) 朝鮮人の被爆

広島、長崎両市において外国人被爆者のことに関してみる場合、その数が圧倒的に多いのが朝鮮人被爆者である。それは単に数が多いというのではなく、一面国際的な面からも、また戦争反省のうえからも、深く考えるべき問題を提起しているものである。すなわち、なぜにそのように多数の朝鮮人被爆者が長崎・広島に存在するのかということ、実はそれ自体が問題の発端である。

以下いろいろな文献特に(「広島、長崎の原爆災害」1979年岩波書店)などを参考にこのことについて記してみることとする。

つまりこのことがらは1910年(明治43年)「韓国併合条約」(日韓併合条約)の締結頃から始まり、日本の敗戦に至るまでの35年間の日本の朝鮮に対する植民地支配と、それを行なわせた日本の、軍国主義による帝国主義の歴史の流れの中に浮かび出た被支配民族の犠牲の一面である。

朝鮮支配のその歴史は、政治的な支配のみではなく、土地、資源、言語なども奪い、また神社参拝、宮城遙拜、創氏改名などによって「皇国民化」を強制しようとするものであった。特に「土地調査事業」(1910～1918年)「産米増殖計画」(1920年～)の名の下におこなわれた農村の再編成によって、朝鮮の農村は収奪、破壊し尽された。そして農地や山林を奪われ、生活の場を失った多くの農民たちは、村を棄てて流民となり、国外へ流れていった。第1次世界大戦勃発によって日本の国内に軍需景気がおこり、低賃金労働力に対する需要が高まるとともに、朝鮮人の一部は、日本の炭鉱や生産工場、あるいは土木工事の労働力として送り込まれた。

その後満州事変(1931年「昭和6年」)に続き、日中戦争(1937年)がおこり、日本の労働力の需要もいよいよ高まったのに伴って朝鮮人の移入も一層激しさを加えた。

1939年には、「国民動員計画」により、炭鉱、鉱山その他の作業要員として、朝鮮人壮丁の募集移入が実施された。悪名高き強制連行(第1期募集労働動員)のはじまりである。

1942年(昭和17年)になると、太平洋戦争のために日本人の青年、壮年が大量に徴兵され、その労働力の不足を補うため、朝鮮総督府による朝鮮人の斡旋移入が強化された。(第2期―官斡旋、隊組織動員)

さらに大戦末期の1944年(昭和19年)には「国民徴用令」が発動されて、徴発、連行の形で大量の朝鮮人が強制的に移入された。(第3期―徴用動員)

朝鮮人被爆者を推定するうえでは、まず長崎原爆時に長崎市及び被爆地

周辺にどれほどの朝鮮人がいたかを知る必要がある。しかしそれが不明確なために、朝鮮人の逐年の増加状況を追跡してみる必要がある。またなぜ1945年(昭和20年)8月9日 彼等が長崎市に居なければならなかったか、この両面の歴史を記す必要がある。

表58 在日朝鮮人人口<sup>\*</sup>の推移(1900~34年)

| 年次          | 在日人口    | 増加数    | 備 考                                         |
|-------------|---------|--------|---------------------------------------------|
| 1900(明治33年) | 196     | —      | 日露戦争調和                                      |
| 5( 38 )     | 303     | 107    |                                             |
| 7( 40 )     | 459     | 156    |                                             |
| 9( 42 )     | 790     | 331    |                                             |
| 1910( 43 )  | —       | —      | 「韓国併合条約」締結                                  |
| 1911( 44 )  | 2,527   | 1,737  | 「土地調査令」発布<br>第1次世界大戦勃発                      |
| 12(大正1年)    | 3,171   | 644    |                                             |
| 13( 2 )     | 3,635   | 464    |                                             |
| 14( 3 )     | 3,542   | ▲93    |                                             |
| 15( 4 )     | 3,917   | 375    |                                             |
| 1916( 5 )   | 5,624   | 1,707  | 「土地調査事業」完了<br>三一独立運動、「旅行証明制度」実施<br>「産米増殖計画」 |
| 17( 6 )     | 14,502  | 8,878  |                                             |
| 18( 7 )     | 22,411  | 7,909  |                                             |
| 19( 8 )     | 26,605  | 4,194  |                                             |
| 20( 9 )     | 30,189  | 3,584  |                                             |
| 1921( 10 )  | 38,651  | 8,462  | 「渡航調停制度」廃止<br>関東大震災<br>「渡航制限制度」実施           |
| 22( 11 )    | 59,722  | 21,071 |                                             |
| 23( 12 )    | 80,415  | 20,693 |                                             |
| 24( 13 )    | 118,152 | 37,737 |                                             |
| 25( 14 )    | 179,870 | 61,718 |                                             |
| 1926(昭和1年)  | 143,796 | 13,926 | 日本経済金融恐慌発生<br>世界経済恐慌発生                      |
| 27( 2 )     | 165,286 | 21,490 |                                             |
| 28( 3 )     | 238,102 | 72,816 |                                             |
| 29( 4 )     | 275,205 | 37,104 |                                             |
| 30( 5 )     | 298,091 | 22,885 |                                             |
| 1931( 6 )   | 311,247 | 13,156 | 満州事変勃発                                      |
| 32( 7 )     | 380,343 | 79,296 |                                             |
| 33( 8 )     | 456,217 | 75,874 |                                             |
| 34( 9 )     | 537,695 | 81,478 |                                             |

<sup>\*</sup>各年末の人口。 ▲は減少。

(文献7)

表59 在日朝鮮人人口の推移(1935~45年)

| 年 次                | 在日人口      | 増加数     | 「国民動員計画」による<br>移入労働者の状況 |         |                    | 備 考                                                                      |
|--------------------|-----------|---------|-------------------------|---------|--------------------|--------------------------------------------------------------------------|
|                    |           |         | 調査認可数                   | 移入者数    | 現員数                |                                                                          |
| 1935               | 625,673   | 82,983  | —                       | —       | —                  | 「協和事業」の推進、<br>同化政策強化<br>日中戦争勃発<br>国家総動員法公布、朝鮮にも施行<br>「国民動員計画」、労務(募集)移入   |
| 36                 | 690,501   | 64,823  | —                       | —       | —                  |                                                                          |
| 37                 | 735,689   | 45,188  | —                       | —       | —                  |                                                                          |
| 38                 | 799,878   | 64,189  | —                       | —       | —                  |                                                                          |
| 39                 | 961,591   | 161,713 | (38,959)                | 19,135  | 18,626             |                                                                          |
| 1940               | 1,190,444 | 228,853 | (120,780)               | 86,765  | 63,038             | 「訓民改名」実施<br>太平洋戦争勃発<br>労務(官弁・隊組織)移入、「朝鮮徴用令」実施<br>労務(国民徴用令実施)移入、「朝鮮徴兵令」実施 |
| 41                 | 1,469,230 | 278,786 | (184,773)               | 126,092 | 77,086             |                                                                          |
| 42                 | 1,625,054 | 155,824 | (307,043)               | 248,521 | 124,097            |                                                                          |
| 43                 | 1,882,456 | 257,402 | (438,130)               | 366,464 | 167,215            |                                                                          |
| 44                 | 1,936,843 | 54,387  | (655,483)               | 551,674 | 270,660            |                                                                          |
| 1945<br>3月末<br>終戦時 | 2,365,263 |         | (711,505)               | 604,429 | 288,488<br>264,030 | 原子爆弾投下、戦争終結                                                              |
| 1946年<br>11月1日     | 1,155,594 |         |                         |         |                    |                                                                          |

<sup>\*</sup>徴用期間満了にともなう解国および逃亡・送還などによって減じた現在員数。(文献7)

朝鮮人人口の推移については、旧内務省警保局の統計、その他の資料にもとづくいろいろな報告があるが、相互に食い違いもあるので、それにあわせて戦後比較的早い時期に出された、関係官庁の諸資料が示されている法務省関係者の論文、ならびに朝鮮人強制連行の問題に関しての文献を参考に、全国の在日朝鮮人の人口の推移を示しているのが、上表である。

1944年(昭和19年)末には、在日人口1,936,843人となっている。

朴慶植(「朝鮮人強制連行の記録」・未来社1965年)によると1945年の終戦時には、「236万5263人に達した」と記してある。それからみるとわず

か半年間に、40万を越える数の朝鮮人が、移入又は移住したということになる。これは本土決戦のための築城工事の動員であろうが、しかしこの終戦時の数字についての資料は、明らかではない。旧内務省警保局の資料では、増加の反面本土爆撃などの影響で帰国する者等もいたと綴じられているので、これらを勘案すれば、終戦時には、ほぼ200万人前後が日本全国に居住していたと見なすのが妥当ではないかとされている。（「広島・長崎の原爆災害」・1979年岩波書店）

前表に示すとおり、1939年（昭和14年）から終戦までに約71万人の「国民動員計画」のうち、実際には60万人が動員配置についたものと、推計されている。しかし一方徴用期間の満了や逃亡、送還などによって帰国した者もあり、その数を減じると、上記計画による移入労働者の現員数は、約28万人となることを示している。また終戦の年の9月1日付の旧内務省警保局保安課の資料によれば「現在内地に在住する朝鮮人の総数は、約193万人……そのうち集団移入朝鮮人労働者は、約28万人を数える。」ともある。しかし、この28万人という数字は、当時の連絡船などの状況その他から、判断した場合、移入労働者の数としては、少な過ぎると考えられている。

前述の本土爆撃の影響による帰国等のことも、総合勘案すれば、要するに、日本敗戦時における在日朝鮮人の数は、ここでは、200万人から240万人とみるのが、妥当であろう。

これらの朝鮮人のうちでも、特に「朝鮮人被爆者」は、「日韓併合」以来日本の植民地政策によって虐げられ、戦争遂行の人的資源として、経済的にも肉体的にも、多くの犠牲を強いられてきた。そのこと自体に加え、さらに原子爆弾という、戦争の落し子によって被害をこうむったのである。それは無謀な戦争を自ら遂行した日本国民の被爆とは、歴史的事情と本質的立場が違うのである。そのことをまず念頭において考える必要がある。

#### 長崎市における朝鮮人の数

長崎県下には多数の炭鉱があり、また長崎市内には三菱関係の軍需工場

が所在したこと、さらにはその周辺の軍事施設建設などのため、多くの朝鮮人が動員されていたが、戦時中におけるその増加率は際立って大であった。下表に示すとおり、1944年（昭和19年）末における県内在住の朝鮮人の人口は、約6万人（うち移入労働者20,474人）となっているが、この数はあくまで県内の数で、炭鉱はすべて長崎市以外にあり、その方の労働者が多かった。そこでこの約6万人のうち、1945年（昭和20年）8月9日長崎市に在住し、そして被爆した者、あるいは入市して被爆した者の数が、はたしてどれ程であったのかがここでは問題である。

表60 広島県・長崎県下在住朝鮮人人口の推移(1935～45年)

| 年次   | 広島県    |           |             | 長崎県    |           |               |
|------|--------|-----------|-------------|--------|-----------|---------------|
|      | 在住人口   | 移入労働者（内数） |             | 在住人口   | 移入労働者（内数） |               |
|      |        | （割当認可数）   | 移入者数* 現員数** |        | （割当認可数）   | 移入者数* 現員数**   |
| 1935 | 17,385 |           |             | 7,229  |           |               |
| 36   | 19,491 |           |             | 7,046  |           |               |
| 37   | 19,525 |           |             | 7,625  |           |               |
| 38   | 24,878 |           |             | 8,852  |           |               |
| 39   | 30,864 | —         | —           | 11,343 | (2,920)   | 657 652       |
| 1940 | 38,221 | —         | —           | 18,344 | (9,715)   | 6,308 4,692   |
| 41   | 48,746 | —         | —           | 22,408 | (13,865)  | 8,967 5,322   |
| 42   | 53,951 | (1,700)   | 1,421 721   | 34,515 | (21,784)  | 17,471 9,551  |
| 43   | 68,274 | (2,500)   | 2,332 936   | —      | (27,546)  | 24,294 11,483 |
| 44   | 81,863 | ( — )     | — 5,944     | 59,573 | ( — )     | — 20,474      |
| 1945 | 60,000 | —         | —           | —      | —         | —             |

\*国内他府県からの転入者若干をふくむ。

〔文献7〕

\*\*徴用期間満了にともなう帰国および逃亡・送還などによって減じた現在員数。

旧内務省警保局は、在日朝鮮人の動向には監視の目を向け情報の収集を図っていたが、一方では「創氏改名」で日本名を付けさせるなど、表面的には「皇国臣民」として同化策をとり、内鮮一体化をはかっていたこともあって、公的な資料では、その所在場所や人員は不明である。ましてそのうちのどれほどが、原爆時に長崎の被爆地域内に所在し、また何人が被爆後入市して原爆の影響を受けたか、それは、敗戦の混乱、朝鮮の独立、ま

た南、北朝鮮の戦争と対立、さらには日本と朝鮮の両国の関係などさまざまなできごとから、現在でもなかなか把握できないでいることがらである。また時期が遅くなるほどその把握は困難となるであろう。

日本政府の本格的調査が行なわれないまま、韓国ソウル市に本拠をおく「韓国原爆被害者援護協会」（現在は「韓国原爆被害者協会」）は1972年（昭和47年）4月次表のような朝鮮人の原爆被害者の数字を示している。

しかし、この場合どこまでを被爆地帯としたのか、また死亡者や帰国者はいつの時点で捉えたものか、いずれも明らかではない。

表61 韓国人の原爆被害状況（1972年4月発表）

|     | 被 爆 当 時 (状 況) |        |        |        |       |
|-----|---------------|--------|--------|--------|-------|
|     | 総被害者          | 死亡者    | 生存者    | 帰国者    | 帰国残留  |
| 広 島 | 50,000        | 30,000 | 20,000 | 15,000 | 5,000 |
| 長 崎 | 20,000        | 10,000 | 10,000 | 8,000  | 2,000 |
| 計   | 70,000        | 40,000 | 30,000 | 23,000 | 7,000 |

（韓国原爆被害者援護協会発表）（文献7・26）

長崎市で被爆した朝鮮人の状況については、厚生省その他政府からの調査はなかった。そこでこれまで政府以外の分野で、このことについてさまざまな推計が試みられている。以下それらの推計資料を基に、若干の考察を加えてみよう。

長崎市においては1970年度から1979年度（昭和45年度から昭和54年度）にかけて、市の事業（国の補助事業）として原爆被災復元調査事業を実施した。それによると、爆心地付近あるいは爆心地から2,500m付近までの工場地域周辺、その他の場所における朝鮮人労働者の宿舍や飯場の所在が、大まかではあるが一応浮きあがった。それは、① 爆心地から約600m付近の大橋町にあった三菱製鋼所朝鮮人徴用工宿舎金剛寮（約50人）② 1,500～2,500mにあたる三菱兵器大橋工場、同半地下工場、住吉トンネル工場付近の合計6カ所の飯場群がそれである。

また三菱関係者の手記集（「原爆前後」Ⅰ・Ⅱ）によれば、三菱長崎造船所の工場にも約2,500人の朝鮮人徴用工が就労しており、その宿舎は爆心地から5km離れた木鉢にあった。そして同じく西泊、小瀬戸、その他5～6kmの地域にもいくつかの飯場があった。

また関連して長崎市の朝鮮人のことにふれた次のようないくつかの記述がある。

(A) 川南造船所（港外香焼島）一終戦時朝鮮人工員300人

三菱長崎造船所一昭和20年1月現在…捕虜443人 朝鮮人3,474人（「市制65年史」後編）

(B) 「長崎では10数人の同胞の話によれば、被爆1年前、爆心から1キロと離れていない三菱造船所（※三菱造船部品工場のことか）、長崎兵器廠（編者注・三菱兵器は1km以上離れているが、そのことと思われる）に働かされていた朝鮮人、数千人、朝鮮人女学生300人（編者注・当時市内や近郊には朝鮮人の女学校はなかったので若い婦女子のことであろうか）が一瞬にして爆死したということである。長崎市大浦元町1の誠考院にある150数体の朝鮮人の遺骨の大半は原爆死亡者である」（「朝鮮新報」1965・8・15）

(C) 「三菱兵器製作所の本工場で約300人の朝鮮人が働いていたが、このほか浦上川沿いにバラックが連なっていた。昭和18年ごろの記録では、約3,000人が親ばくの協会の会費を納めていたが、実際には1万人以上いたのではないか、原爆が落ちたとき、ある飯場では120人のうち生存者はたった2人、浦上地区の朝鮮人はほぼ全滅した。」（「朝日新聞」1974・4・16日号）

(D) 「小瀬戸と神の島間を埋め立てる川南の仕事をしていた。その頃は上村組の配下で、小瀬戸のほかに神の島にも飯場があり、神山、島山、西尾、田中、中村、荒井、その他10以上もあった。各飯場には飯場頭がいて、2、3百人集まっており、そのほかにもあちこちから人夫を

連れてくる寄合いができて、全部で2,3千人の朝鮮人が動員されていた。三菱徴用工3千余人は本鉢寮に収容され、三菱兵器関係の工事にも3千人ほどが従事していた。

このほか、少し離れた香焼島・端島・高島・伊王島などの炭鉱地帯にも相当数の朝鮮人が働いていた。〔「長崎の証言」第10集・朴政奎談〕

三菱関係者の手記集「原爆前後」I・IIIによれば、前記(A)及び(D)の中にある三菱造船所の徴用労務者3,000人は、敗戦間際には減少して、被爆時には2,400~2,500人であったといわれている。

以上を大まかにまとめてみると、長崎市の朝鮮人労務者の飯場、宿舎は次の3つの地域区分にわけられる。

- (1) 長崎市北部の爆心地から2,500m以内の三菱製鋼大橋寮と三菱兵器関係工事の飯場、宿舎
- (2) 爆心地から3,500mから4,000mにわたる三菱造船所付近の飯場
- (3) 爆心地から4,000mから6,000m南西部の本鉢寮、西泊、小瀬戸などの飯場群

以上のようになる。これらの原爆当時の人員は明らかでないが、前述の証言などから、一応これらの地区の朝鮮人労務者とその家族の概数をそれぞれ3,500人程度と考えれば、10,500人という数値になり、さらに市内の他の工場や地域に散在する朝鮮人の家族をふくめて、1,000~2,000人とみれば、その総数は11,500~12,500人ということになる。これに8月9日原爆落下以後、早期に爆心地域に入った若干の者の数を加えると、ほぼ12,000~14,000人となる。

この数字(総数)を基にして、1945年(昭和20年)11月の日米合同原爆災害調査団の推定死亡率により被爆した人数を推定すると、まず前記(1)の範囲では爆心地から2,500m以内の死亡率63.1%を所在者推定数3,500人にあてはめると、その範囲の死亡者数は2,200人となる。もう少し詳細に

みると、朝鮮人労務者は600m付近の大橋の寮の50人と1,500~2,500mの三菱兵器関係のふたつに分かれる。このうち大橋寮は爆心地に極めて近いので、その全員が死亡とみて、もう一方の三菱兵器関係の方の死亡率をどうみるかであるが、1.5~2.5kmでの死亡率は、17.2%である。しかし一般の住家と異って飯場はバラックであり、また労務は野外が多いので、その点を考え1.0~2.5kmの死亡率34.9%を用いて残り3,200人の死亡数を割り出すと1,187人となり、これにさきの大橋の寮の全員を加えると、この2.5kmまでの被爆死亡者は1,500人に近い数となる。この推計は後述の「広島・長崎の原爆災害」における推計方法であるが、この数は少し少ないようにも考えられる。何故なら、前述のように、大半は野外労務で、飯場もまた極めてお粗末なものであったので、死亡率はさらにこれを上回るだろうからである。

次にこの範囲の三菱造船所関係の死亡者についてみると、同所の主工場は、長崎港の西岸、爆心地から3.5~4kmの釜の浦、向島、立神といった地区で、人的被害は少なかったが、同所は2kmの圏内に、船型試験場(家野町)製材工場(竹の久保町)幸町工場(幸町)大橋部品工場(大橋町)とふたつの寮があり被害は甚大であった。1951年(昭和26年)6月現在で三菱造船所が確認した原爆死亡者数は、日本人を含めて1,815人と記録されている。しかしこれには調査もれも考えられ死亡総数は2,000人を上回るものとする。(日米合同調査団の資料によれば、3~4kmでは1.2%の死亡率となっている)

そこで、このうちの朝鮮人死亡者となると、当時の就労は3交替制がとられ、本鉢の山中(爆心地から5km)の宿舎から交替で出勤していたので、そのことを考慮すれば、これらの徴用工その他ここで働いていた一般朝鮮人労務者の死亡数は、就労総数3,500人中150~200人となる。

(3)の西泊、小瀬戸附近、その他の市内居住者の場合は、爆心地から3~5km以上離れたところで、その附近では長崎市の地形上、致命的被害は少

なかったと想定され、数に上積みしなければならないほどの死亡者があったとは考えられない。

以上を総合すれば、被災地区内に12,000～14,000人の朝鮮人がいたとして、そのうち1,500～2,000人の被爆死亡者となる。この数は、さきに掲げている「韓国原爆被害者援護協会」が推定した生存者約1万人という数と大体一致しているが、死亡者数についてはかなりの開きがある。

また前述の死亡者のほかに「創氏改名」により日本人として数えられ、一般市民、学徒報国隊、女子挺身隊員などの犠牲者数のなかに包含されている朝鮮人死亡者もあるであろう。現に金比羅陣地で戦死した48名の将兵のうち4名は朝鮮人兵士であったといわれているが、これも上述の死亡数を変えるほどの多い数ではない。

以上は〔「広島・長崎の原爆災害」<sup>広島市原爆災害誌編集委員会編 岩波書店刊</sup>〕の中で、広島大学の湯崎稔らが綿密に検討し考察したものである。

ここで推計された死亡者数は韓国原爆被害者援護協会発表の死亡者数（1万人）に比べると、かなり低い。しかし、ここまで理論的に推定した湯崎氏ら（広大原医研）の労は多として、これを参考に長崎の調査もさらに究明を期さねばならぬであろう。

長崎市の場合、長崎大学には、広島大学の「原医研」のような社会科学部門が存在しない。そこで長崎総合科学大学の鎌田定夫らと、長崎在日朝鮮人の人権を守る会の岡正治らとが、それぞれの立場から朝鮮人の原爆被爆の問題にとりくんでいる。

鎌田教授は、長崎の証言運動を通じて朝鮮人の被爆証言を積極的に発掘整理している。彼は長崎造船大学長崎平和文化研究所発行の「平和文化研究」（1978年創刊号）の中で、「広島、長崎における外国人の被爆」というテーマの一端として朝鮮人の被爆の問題にふれ、その中で長崎における朝鮮人の被爆状況について推計を行っている。それによれば、長崎における朝鮮人の被爆者概数は13,000～14,000人、うち死亡者3,000～4,000人とし

ている。（次表62参照）

表62 朝鮮人被爆者概数とその動向の推定（1945年末）

| 地名 | 被爆者総数         | 死亡者           | 生存者    | 帰国者    | 日本残留者 | 現残留者        | 手帳交付者     |
|----|---------------|---------------|--------|--------|-------|-------------|-----------|
| 広島 | 32,000～40,000 | 12,000～20,000 | 20,000 | 15,000 | 5,000 | 7,300 X 0.3 | 1,900 + 7 |
| 長崎 | 13,000～14,000 | 3,000～4,000   | 10,000 | 8,000  | 2,000 | 250 + a     | 110 + b   |
| 合計 | 45,000～54,000 | 15,000～24,000 | 30,000 | 23,000 | 7,000 | 2,415 + c   | 2,010 + d |

※「現残留者」というのは広島市1962年現在の居住者数と長崎市1978年現在の居住者数で、0.3をかけたのは2世3世が70%を占めるためである。aは両市以外の地域に残留している者を示す。「手帳交付者」は広島・長崎市の現在の手帳交付者の概数で、bは両市以外の地域に居住する手帳交付者を示す。（文献25）

なおこの数値は「韓国被爆者援護協会」が推定した「被爆生存者」の推定（広島2万人、長崎1万人）が一応正確なものと仮定した場合のものである。

岡正治は、長崎における「原爆白書を作る会」の先鞭を付け「長崎原爆朝鮮人犠牲者追悼碑」を1979年8月9日 建立しているが「広島・長崎の原爆災害」の記述や長崎市が復元調査で把握した朝鮮人の所在状況等には納得できず、1981年（昭和56年）から1年間にわたり会独自で調査班を編成して朝鮮人被爆のことに関し調査を実施している。そしてそこでの結論として「長崎における朝鮮人被爆者数は、どのように内輪に見積っても約2万人。そのうち死亡者は約1万人」と推定している。

長崎の朝鮮人被爆者数の推定（1982年8月）

長崎市被爆者総数19,391人 死亡者9,169人

（長崎在日朝鮮人の人権を守る会「原爆と朝鮮人」より）

次に岡正治代表調査員等の調査の概要と推計方法を述べておきたい。

「長崎在日朝鮮人の人権を守る会」—この調査団が詳細に調査した長崎市および周辺地区の朝鮮人の飯場、寮、長屋、人夫小屋等1945年8月9日

原爆被災前の居住人数は推計も混じえ13,035人であったとされている。これらは「直接」あるいは「入市」の別はあっても、すべて被爆者である。

(これをここでは(A)グループとしておく)

つぎに原爆落下当時、長崎市内に「日本人」として、市役所の戸籍係に登録記載されていた「一般朝鮮人」の人員数を、6,356人と推定している。

(これを(B)グループとしておく) この(B)グループの算定の根拠は次のようである。

1947年(昭和22年)日本全国の在住朝鮮人は、59万8,507人であって、この数は1945年(昭和20年)の約4分の1に当る。そこでこの比率を1947年9月の長崎市内在住(朝鮮人登録索引簿による数)1,816人にあてはめて、その数の4倍に当る朝鮮人が居住していたものと考えてもよいが、徴用等で渡日した者のなかにも、まだ残留していた者がいたとも考えられるので、その倍率を3.5倍と考えて前記1,816人に乗じると6,356人が市内に居住していたものと推定されるというものである。この(B)も被爆者である。そこで、前述の(A)と(B)の両グループを合計すると、19,391人が長崎市およびその周辺における朝鮮人(一般募集、徴用、強制連行)労務者および一般朝鮮人の合計推定人数であるとされている。それはまた被爆者総数でもある。

これはさきに韓国原爆被爆者援護協会が発表した長崎の総被害者数20,000人という数に相当近づいている。

このなかで、被爆死亡した人数を推定するのもまた困難であるが、この調査団は、(1) 爆心地から1,500m以内の被爆朝鮮人労務者を全部死亡とみなして、2,760人 (2) 爆心地から1,500m以上の朝鮮人労務者の死亡率を50%とみなして、5,138人と推定している。すなわち、さきの(A)グループの13,035人から2,760人を差し引いた数の5割に相当する。この適用死亡率についての考え方は、たとえ1,500m以遠に居住地(寮、飯場、長屋、小屋など)があったとしても、証言によれば、大半の業務の作業現場は、

爆心地に近く、ほとんどが屋外作業であるので、直接被爆した者は多数で、

「居住地から爆心地までの距離で被害状況を想定するのは、むしろ非科学的である。」というものである。そこで前記(1)と(2)の合計7,898人が被爆死亡した「飯場、寮等居住の朝鮮人労務者」すなわち前記(A)グループの推定被爆死亡者数ということになる。

さらに敗戦時日本人として市民生活をしていた「一般朝鮮人」(B)グループ) 6,356人のなかにも、当然被爆死亡した者がいるものと思われるので、それらの人々の死亡率の準拠を一応1945年(昭和20年)6月当時の長崎市の所在人口238,908人と原爆による死亡者数73,884人の比率31%に求め、これより少し控え目に見積って20%として計算すると、1,271人がBグループの被爆死亡者数となる。

そこでこの(A)(B)両グループの被爆死亡者を合計した数、すなわち7,898人+1,271人=9,169人が、長崎における一般朝鮮人と、朝鮮人労務者の被爆死亡者総数であると推定している。「原爆と朝鮮人」長崎朝鮮人被爆者実態調査報告書・第1集) 1982年8月の推定。

なおこの報告書には、香焼、伊王島、高島、端島などを含めた長崎周辺全地域の朝鮮人総数は、35,000人前後であろうとも記されており、そして今後さらに継続して、具体的な調査を実施してゆく必要があることを強調している。

1981年(昭和56年)6月長崎市は独自に、朝鮮人の被爆に関する調査結果を、資料的に一応とりまとめ発表した。その内容は、おおよそ次のとおりである。

#### 被爆者数

(イ) 長崎国際文化会館所蔵の公的資料、刊行物により氏名の判明した被爆者数2,261人(うち22人は氏名不詳)

(ロ) 証言等による推定被爆者数10,404人 計12,665人

またその他にも小規模の飯場や、人数の確認ができないところもあること

を考慮し、その総数を12,000～13,000人と推定した。

死亡者数1,400～2,000人と推定。

この推定死亡者数の算定については、次のような、ふたとおりの方法が、試みられている。

(イ) 爆心地に近い、浦上以北に居住していたと思われる、3,500人については、2.5km以内の復元調査の死亡率37%を乗じて、1,295人という数値を得、さらにこれに公的資料に基づく死亡確認者102人（金剛寮40人、浦上洞務支所61人、福田小浦地区9人）を加えると約1,400人となる。

(ロ) 被爆者総数13,000人に、上記の長崎国際文化会館所蔵の公的資料による死亡率15.3%  $\left( \frac{347 \cdots \text{死亡者}}{2261 \cdots \text{被爆者}} \right)$  を乗じると1,989人＝2,000人となる。以上の方法によって得られた数値から、死亡者数を1,400～2,000人と推定したものである。

なおこの調査は、さきに長崎市が実施した原爆被災復元調査事業における調査結果を基礎としながら、それに長崎国際文化会館に保存されている公的な文献資料、図書、証言集等から得られた情報を集積し、さらに現地調査や関係者との面接調査によってこれを補足して、数を重ねていくといった方法によったもので、その調査は主として1978年（昭和53年）7月から、1981年（昭和56年）6月までの間に行なわれたものである。

以上、これまでに試みられた朝鮮人被爆についてのいくつかの結果と推計とを述べたが、それぞれの推計値には、なおかなりの開きが見られる。これについては科学的検証に堪えるべく今後さらに究明の努力を重ねてゆくべきであり、現時点では長崎市の推計にたよらざるをえないと考える。

しかし、いづれにしても、多数の朝鮮人が被爆したことは事実で、それらの人々は被爆した後、さきに述べたようないろいろな事情から誰からも保護されなかったわけである。また1965年（昭和40年）に日韓基本条約が締結されたが、その時点での韓国政府の対日請求権の放棄によって、それは朝鮮人被爆者の救済と援護のうえで大きな障害となった。

日本政府が朝鮮人の被爆について本格的な調査をしていないことや、北朝鮮共和国と正式な国交がないこと等のため、いまだに朝鮮人被爆者は切り捨ての状態となっているのは、同じ被爆者として真に申し訳ないことである。

そういった状況のなかで、一部の市民運動の人々が、朝鮮人被爆者の実態把握に少しでも追ろうと努力していることに対しては、敬意を表したい。しかし被爆後39年を経過した今日、その調査は非常な努力を要することは必然であり、いまだに政府がその調査に着手さえしていないのは残念なことである。

### (3) 中国人の被爆

中国人の被爆者は朝鮮人の被爆者ほどその数は多くないが、被爆するまでの経過は、朝鮮人の場合と同様多分に問題を含んでいる。

長崎にとっては中国人は全く隣人である。長崎市は徳川時代からの貿易港であり、長崎—上海間は、日中間の最短距離で、その航路は、日中を結ぶ主要な交通路であった。

中国人は、商業、食料品販売、料理店などを営み、長崎の町の至るところに住んでいた。特に新地という地域の一区画には、華僑が多く、街も盛んであった。

本来、長崎においては、中国人は文化が高く、富裕で、尊敬を受けていた時代があった。しかし日本が帝国主義となり、軍国主義が興隆するにつれ、市民が中国人と離れていくのである。日中事変勃発後、中国は敵性国となる。在住の中国人は次第に官憲の圧迫をうけ、商業も、料理店も、事業が困難になり、帰国する者が多くなった。

1938年（昭和13年）1月、中国領事館が閉鎖されたが、日本人との結婚その他の事情で長崎市にはなお600人余りの中国人が残留していたといわれている。（黄永珠の証言）出身の多い順番からいうと、福建省、江蘇省、浙江省、広東省、広西省で、その他台湾の出身者もいた。これらの約600

人が被爆したのではなからうかともいわれているが、あるいはそれ以上であるかも知れない。なお長崎県下には、太平洋戦争開始に伴う労働力の不足を補うため、東条内閣時代の閣議決定によって強制連行された中国人が次のとおりいたといわれる。〔「草の墓標」新日本出版社、1964年〕

三菱機銃銃業所 244人  
高島端島抗 204人  
高島新抗 205人  
崎戸銃業所 436人  
日鉄銃業所鹿町炭坑 196人

この強制連行された中国人のうち1945年8月9日に爆心直下の松山町の浦上刑務支所に収容されていて被爆死したものが33人いる。そこは原爆時、炎の増場と化して、副島支所長以下職員、収容者全員が即死したところである。ここに中国人が収容されていた理由は、間諜（スパイ）利敵、陰謀、窃盗等の刑事犯容疑者として送られていたものであるが、実はこの33人は、崎戸銃業所（三菱）の27人と日鉄銃業所鹿町炭坑の6人の中国人であった。〔「平和文化研究、創刊号」1978年～「広島・長崎における外国人の被爆」鎌田定夫〕彼等は過酷な労働と、栄養の低下による栄養失調によって、反逆闘争をおこしたのである。（長崎市は中国人死者は32名と考えている）

ちなみに朝鮮人13人もこの刑務所内で被爆死している。

このほか長崎医科大学関係の台湾出身の医師・学生として、呂雲龍助教以下18人とその家族5人の原爆死亡が判明している。

長崎大学訓名誉教授は、原爆の思い出というより長崎医科大学の原爆災害の書である「忘れな草」のなかで、日本人の学生と共に勉学していた朝鮮人1人、中国人2人、台湾人18人の原爆死亡者を記している。そのうち台湾人18人の学生については1974年（昭和49年）までに遺族と連絡して追悼会も催している。

以上のことから長崎における被爆者数を650人とし、そのうち死亡者は、

死亡率を24%として156人と推定する。

刑務所のあった松山町は爆心直下であるが、中国人の多かった新地の居住地は3,500m以上離れているのでその死亡者数はなかなか正確には言えない。

1970年3月、被爆者手帳の交付をうけているものは101人、そのうち1,500m以内のもの5人、1,500～2,000mのもの6人、2,000～3,000mのもの27人であった。

1978年3月の時点で長崎市が交付した被爆手帳取得者は、朝鮮人110人、中国人124人（「長崎市内在住の中国人102人」男56人 女46人）（「平和文化研究」鎌田）

中国人の刑務所での被爆は、本人の人権問題よりも、日本の大陸における無暴力な戦いの犠牲者ということで反省しなければならない問題である。

#### （4）その他の外国人の被爆

さきにも述べたように、長崎市は明治以来、キリスト教日本布教の西日本の拠点であった。それらの布教活動の中心は、次第に東京や関西に移るが、戦前までは多数のキリスト教関係の聖職者、牧師、教師などがいた。

長崎市が、日中戦争の時期から次第に三菱関係の軍需工業の都市と変化するにつれて、キリスト教にも官憲の迫害が加わったのである。

思想的には皇国史観によって、天皇は神だとか、そういうことで布教を圧迫した。鎮守の宮の礼拝でカトリック系学校にも圧迫が加わった。

また、西欧系のキリスト教の教会や学校は、えてして場所が丘の上とか、岬の先端とかに位置しているため、要塞地帯あるいは軍港としての軍事政策上好ましくないということで、何かと圧迫を加え、スパイ行為の探索とか、その他いろいろなことで干渉をうけた。

特に三菱造船所で「武蔵」という巨大な戦艦を作りはじめからは、それらの外国人聖職者の動静を一段ときびしく監視するようになった。（注・1940年「昭和15年」武蔵進水）そういうきびしい干渉、圧迫に耐えきれな

いで引揚げた外国人は多い。しかしあくまで踏みとどまって布教をしようと志していた者、および長崎の領事代理等は、1941年（昭和16年）12月、太平洋戦争が始まると同時に軟禁された。名目は「日本人が敵性の外人に危害を加えるおそれあり」ということで、それからの保護ということであるが、要するに敵性国家の外人の自由行動を禁じて一カ所に集めたのである。監禁というべきである。

フランス領事館の代理領事ら3人のフランス人が居残って、他は帰国するか、あるいは国外に出ていた。また宗教界ではプロテスタント（新教）系の漢西学院、活水学院の教師らはすでに米国に帰っていった。

カトリック系で太平洋戦争の始まるまで居残っていた司祭、修道士、修道女（尼）は、浦上の本原町の聖フランシスコ神学校の司祭修道士（カナダ人）城山町マリア会（海星学校を含む）の修道士、浦上上野町、大浦南山手町の幼きイエズス会（常道学校）の修道女である。それに本河内町の聖フランシスコ会（聖母の騎士）の司祭、修道士たちであった。カナダ人（本原町）は6人。

本河内町の聖フランシスコ会は、ポーランド系であるため、収容は免れて、終戦近くまでそのまま本河内にいることができた。それ以外のものはすべて、一応城山町の聖マリア修道院に、それから兵庫県の神戸再度山に収容された。また最後まで本河内町の聖母の騎士團に残っていたポーランド系の司祭、修道士も終戦近くになって、佐賀県小城町、あるいは熊本県栃木に移された。それは1945年7月ごろである。そのころに神戸から女性聖職者すなわち修道女40人が本河内町の「聖母の騎士」に移された。そこは爆心地からおおよそ3,500m離れているので、8月9日の原爆日には少くとも死亡は免れたはずである。

彼等宗教界の人々に言えることは、彼等は皆日本と日本人とを愛していたのである。

戦争前の思想的迫害、戦時中の監禁による精神的、肉体的苦痛、官憲の

一部の迫害にもかかわらず、日本の敗戦のあと、すぐに慈善（福祉）に働きはじめた。

長崎原爆に対しては非常に心の痛みと、戦争の残酷さを切実に感じたのであろう。

聖母の騎士團は、孤児救済に、また本原町の聖フランシスコ会の聖職者たちは被爆地の病院建設や、被爆者の救護に当った。また幼きイエズス会のフランス系の修道女たちは、乳幼児の孤児の養育に働いたのである。彼等の戦後の働き一勝者、敗者をこえての働きは、今の社会福祉が何であるか、それを日本人に自覚せしめた。（「長崎県警察史」「回想の浦上史」「長崎文化No. 27」）

#### 〔5〕捕虜の被爆

長崎市のほぼ中央に太平洋戦争の捕虜収容所があるということは、一般の長崎市民にもわかっていた。

太平洋戦争中、1942年（昭和17年）から日本本土各地に捕虜収容所が開



福岡俘虜収容所第2分所の捕虜たち（町田満夫氏提供）

設され移転し、あるいは閉鎖されている。

九州では福岡市の西部軍管区司令部内に本部をおく福岡捕虜収容所（軍では「俘虜収容所」と呼んでいた）傘下に19分所、3派遣所がおかれ、福岡、長崎両県下に集中していた。それは炭坑、鉱山、造船所への労働力配置のためで、長崎県下では4カ所にあった。長崎市及びその周辺には2カ所で、香焼の川南造船所と、長崎市の三菱造船所がその配置先の労働場所であった。

収容施設は「福岡俘虜収容所第14分所」が長崎市の幸町に、「同第2分所」が港外の香焼島にあった。

その捕虜の将兵は南方の戦線から移送された。長崎の第14分所には1943年（昭和18年）1月2日から、オランダ人（ジャワ出身）イギリス人が収容されていたが、さらに1944年（昭和19年）5月、あらたにアメリカ人・オーストラリア人約30～40人が加わった。

田島治太夫兵長（当時捕虜係）が門司港で引きとった捕虜の正確な人数は明確でないが、彼の証言からすると480人前後といわれる。しかしそれを裏付ける資料はない。

1979年（昭和54年）10月、長崎市は厚生省より1,794枚の捕虜に係るカードを入手した。このうち465枚が長崎市幸町の第14分所関係のものであった。入手したカードには連番が付されているが、74枚の欠番がある。

従ってこの数字が必ずしも全体の状況を表わすものではないが、参考として次に一応掲げておく。

表63 福岡俘虜収容所第14分所関係の「捕虜カード」の状況

| 国籍         | カード<br>枚数        | 原爆の時にはいなかった者     |                 |                |                | 原爆の時<br>いた者      | 原爆で死<br>亡した者   |
|------------|------------------|------------------|-----------------|----------------|----------------|------------------|----------------|
|            |                  | 他の収容<br>所へ移動     | 原爆前<br>に病死      | 原爆前<br>に事故死    | 8.1の空<br>襲で死亡  |                  |                |
| オランダ(蘭)    | 338 <sup>人</sup> | 118 <sup>人</sup> | 86 <sup>人</sup> | 3 <sup>人</sup> | 1 <sup>人</sup> | 130 <sup>人</sup> | 8 <sup>人</sup> |
| イギリス(英)    | 42               | 26               |                 |                |                | 16               |                |
| アメリカ(米)    | 14               | 14               |                 |                |                |                  |                |
| オーストラリア(米) | 71               | 36               | 11              |                |                | 24               |                |
| 計          | 465              | 194              | 97              | 3              | 1              | 170              | 8              |

〔文献11〕

日本国内の戦争態勢のめまぐるしい変化のなかで、捕虜の転入、転出もあわただしかった。

またかれらは、慣れない日本の寒さと、栄養の悪さ、設備の不完全、それに重労働等の悪条件が加わって肺炎が流行し、それに現地で感染のマラリア、栄養失調も手伝い原爆前年の冬ごろには続々と死亡している。

肺炎その他の死亡は、100人余りといわれている。（三菱造船所・岩永岩男の証言）

次に考察の資料として、関係者の証言その他を拾って掲げてみよう。

・三菱長崎造船所の8月11日付「8月9日空襲被害報告（その1）」には死者～「俘虜37」と記されているのが一応注目される。しかしこの報告の時期は、まだ混乱の状況下であるので果して正確な数かどうかには疑問が残る。

・ピーター・マグラス・カー（元濠州軍軍曹）の証言～1944年（昭和19年）6月1日捕虜として乗船。シンガポールを6月3日出航。772人の捕虜は、オーストラリア人267人、アメリカ人43人、イギリス人196人、オランダ人266人からなっていた。6月11日マニラ着、同14日出航、同19日台湾の高雄港に碇泊、ここで捕虜たちは、日本に送還される多くの日本人とともに他の船に乗船。6月24日午後11時50分ごろ、船団はアメリカ潜水艦の攻撃を受け、捕虜をのせた船一隻を含む、4隻が沈没した。（攻撃艦名、沈没船名は略す）。

生存者は一隻の小さい船に救助され、長崎に連れていかれ、浦上川沿いの三菱工場のグラウンドにある捕虜収容所（※第14分所のこと）に入れられた。ここにはすでに多くのオランダ人の捕虜がいた。

新しいグループは銑物工場で働かされることになった。11時間労働で月3日の休日、当初772人の乗船者のうち、沈没船の生存者は、オーストラリア人72人、アメリカ人13人、イギリス人42人、オランダ人85人計262人だけだった。到着した時の収容所の捕虜の数（前からいた者）はわからな

い。日本についてから1944年の後半に約80人の捕虜が病気や事故で死亡した。

この中には沈没船からの生存者リストに含まれていた11人のオーストラリア人も入っている。この人たちは肺炎で死亡した。

1945年6月30日ごろ、福岡俘虜収容所第14分所の捕虜の大部分は、オオミネ（大嶺炭鉱？）に移され、あとには、オーストラリア人24人、イギリス人16人、オランダ人161人 計201人が残された。

1945年8月1日、長崎にはげしい空襲をうけ、私たちの収容所の南側付近に数箇の爆弾が投下された。……オランダ人1人が死亡、数人が負傷した。同年8月9日、（収容所内で被爆）残念ながら、そのあとのできごとは何も覚えていない。宿舎がやられたとき、私は破片の中に埋まってしまう、その後の5日間は記憶を喪失していたから。……捕虜の被害は死亡4人、負傷者約30人（爆風によるもの数人、熱線による火傷多数）だった。私とイギリス人1人を除いて重傷者はすべてオランダ人だった。

他の捕虜の多くは軽傷を負った。8月14日から29日までの間に、あと4人のオランダ人が火傷やけががもとで死亡した。（以下略）

※この証言による6月30日ごろ以降の数字と、さきの長崎市が入手した捕虜カードの示す数値とを比較すれば、原爆のときにいたオランダ人の数を除けば、他は全く符合しているので、この証言の信ぴょう性は充分認められる。

・元オランダ兵チャールズ・パールキイの手記～「1945年（昭和20年）6月私たちの収容所には約375人が収容されていたが、私たちはふたつのグループに分けられ、体格のよい200人が収容所に残り欠陥のあるものは出ていった」（『鉄條網の中で』より）

・W・H・ローレンス記者の報告～「長崎の原爆によって連合軍捕虜8人が死亡、38人が負傷した。（1945年9月10日付『ニューヨーク・タイムズ』）

・岩永岩雄（元三菱長崎造船所訓育課捕虜等担当係長）談～昭和18年1

月に捕虜が来てからは捕虜関係を担当していた。寒さのため収容所の中にクループ性肺炎が流行した。肺炎で死んだのは100人余りであった。～ある日1人が仕事でドックに落ちて死亡した。～昭和19年5月、日本近海で潜水艦でやられた捕虜、126人がまた幸町の収容所に来た。アメリカ、オーストラリア、イギリス等の入種がいた。

・田島治太夫（元幸町捕虜収容所主計兵）の手記～1942年（昭和17年）1月2日、長崎の第14分所には480人前後の捕虜が配分された（門司で）～昭和20年8月1日の空襲で3人の捕虜が死んだ。8月9日の原爆で被爆～3、4日ほど洞窟に寝泊りして、焼跡からの死体発掘作業にとりかかった。私の記憶では少なくとも50～60人ぐらいの遺体がみつかった。13日から14日戸町の寮に移ることになった。浪の平の太平寺に50体ぐらいの遺骨をあずけた。（以下略）

以上のさまざまな証言や資料を基に総合的に考察してみると、まずイギリス人、アメリカ人、オーストラリア人の数は、市が入手している厚生省の「捕虜カード」の数とピーター・マグラス・カーの証言による数とが、それぞれの点においてほぼ一致しているし、また岩永岩雄の証言～19年5月に「潜水艦にやられた捕虜126人が、また収容所に来た」とあるのは、「イギリス、アメリカ、オーストラリア」の合計数127人にほとんど近似している。この部分については「捕虜カード」の数値を一応正しいものと見なしてよいのではなかろうか。

次に昭和20年6月以降居残った者の総数についてみると、ピーター・マグラス・カーの証言（201人）とチャールズ・パールキイの証言（200人）とが近値している。これも正しいものとみなし、一応より具体的な前者の証言の数を採用することとし、さらに前記「捕虜カード」74枚の欠番を仮りにオランダ人と見なして、これらの数値から逆算してみると、おおよそ表64のような結果となる。（表63参照）

表64 第14分所の収容者推計

| 国       | 内訳 | 受人数               | 原爆前の転出・死亡          |                   |                   |                   | 原爆時の収容者            |
|---------|----|-------------------|--------------------|-------------------|-------------------|-------------------|--------------------|
|         |    |                   | 他へ移動               | 被爆前病死             | 被爆前事故死            | 空襲死亡              |                    |
| オランダ    |    | 1412 <sup>A</sup> | (159) <sup>A</sup> | (89) <sup>A</sup> | 3(1) <sup>A</sup> | 1(3) <sup>A</sup> | (140) <sup>A</sup> |
| イギリス    |    | 42                | 28                 |                   |                   |                   | 16                 |
| アメリカ    |    | 14                | 14                 |                   |                   |                   |                    |
| オーストラリア |    | 71                | 36                 | 11                |                   |                   | 24                 |
| 計       |    | (539)             | (235)              | (100)             | 1(3)              | 3(1)              | (200)              |

※事故死と空襲死は、「補遺カード」と証言とでは合計数は合致するが内容が逆になっている。〔 〕は証言の数

被爆前病死は証言を参考に一応(100)とした。

受人数は田島治太夫の証言では「オランダ」480人前後となっているが、裏付けがないので、「補遺カード」の枚数に欠落74枚を加えた数を一応記している。

( ) の数は逆算して得た数である。

(文献11)

このうち原爆による死亡者数は、8人とするものが、「補遺カード」・「ピーター・マグラス・カーの証言」「ローレンス記者の報告」と最も多く有力であるが、その他、37人(三菱長崎造船所の報告)や約50人(田島治太夫の証言)があり、定かでない。

負傷者は約30人という証言もあるが、それはおそらく重傷者の数だけであろう。

また原爆前の病死・事故死・空襲死、それに米軍潜水艦の攻撃による死亡を合計すると約620人ほどの数になり、まさに受難の連続であったといえる。

## 2 長崎の原爆被爆者の現在

### (1) 長崎での社会学的調査

長崎の被爆者に対しては、本格的な社会学的立場からの調査はほとんどみられなかった。長崎大学の原爆後障害医療研究施設も、医学部の附属施設であって、広島のような「研究所」の設立までには至らず、従って社会科学部門の講座がひらかれるまでにはならなかった。

原爆被災復元調査が1970年(昭和45年)ごろから爆心地附近で行われ始めたが、それは、学術的分野からのものではなく、地元住民の発意と努力とを基本としながら、それに市の「復元調査室」の極めてわずかなスタッフが、行政面から支援し、リードし、とりまとめるといった形のもので、一応おおまかな資料は抱えられたものの、そのデータを科学的に分析したり、解明し、まとめたりする作業はまだ今後に残されている。

1977年(昭和52年)にNGO(国連非政府組織機関)の学術調査団が長崎市にきた。それは、「原爆被爆の実相とその後遺を調査する」という目的であった。この調査は短かい期間ではあったが、外国の調査団としては、1945～1946年(昭和20～21年)にかけて行なわれた日米合同の被爆現地における「被災の実態」の学術調査団につぐものであった。この調査団の来訪は日本政府や、広島、長崎の人々に非常に刺激を与えた。そしてこの30年間の間に「被爆の実相と後遺」という基本的、基礎的な調査に何ら本格的に取り組んでこなかった日本人自身が恥しい思いにかられたのである。この調査自体は非常に短時日の調査ではあったが、そのために与えられた刺激とヒントは多大なものであった。

長崎では特に、長崎原爆被災者協議会(日本被団協長崎支部)やその他の被爆者団体、それに長崎総合科学大学及び長崎大学の教授や助教授等の有志が協力して報告書をまとめあげた。それが(長崎原爆被害総合報告1977年「原爆被害の実相—長崎レポート」)である。

日本において東京、広島市、長崎市でのNGO調査団のワークショップ(研究集会)が終わった後も、このとき組織された長崎の準備委員会の専門委員会は、発展的に「原爆問題研究普及協議会」(「原普協」)として残り、それ以来今日まで原爆問題の研究普及を行う会として、いろいろな研究調査をつづけている。殊に長崎総合科学大学の高橋助教授は、これまで原爆問題に取り組んできた調査員と共に、社会科学的に、あるいは被爆者の心理学的に現在なお調査を続けているところである。